

【普通作物】の【高温・小雨】対策について

<8月>

農業経営支援課

【普通期水稻】（幼穂形成期～登熟期）

（１）予想される被害状況

- ① 高温により白未熟粒が発生し品質が低下する。
- ② 病害虫の多発により収量・品質が低下する。

（２）事前対策

- ① 白未熟粒を抑制するため、基本的な水管理を徹底する

（ア）穂ばらみ期から出穂開花期

湛水状態とする。蒸散量が多い時期であり、吸水量が不足すると穎花の発育や受精に影響を受ける。

ただし、出穂前の湛水状態で水温が高くなると、根が傷み登熟に悪影響を及ぼす恐れがあるので、用水の入れ替えを行う。

（イ）登熟期

間断かん水で根の健全化を図る。落水時も水分不足にならないように土壌が十分湿っている状態を維持する。

用水の水温が低く、十分な用水が利用できる場合、かけ流し（特に夜間）が有効である。

（ウ）ほ場・用水

畦畔からの漏水がないか確認する。

地域全体で節水に心がける。

用水が不足する地域では、地域ぐるみで計画配水に努める。

- ② 病害虫発生に注意し、農薬の使用基準を確認の上、適期に防除する。

（３）事後対策

- ① 間断かん水を継続する。

早期落水は、白未熟粒の発生助長や胴割米・不完全米・屑米の増加につながるため、収穫５日前までは湛水を保つ。

- ② 病害虫の発生状況を確認し、必要に応じて追加防除を行う。

【大豆】（生育・開花期）

（１）予想される被害状況

- ① 生育が不良となったり、開花や着莢が悪くなる。
- ② ハスモンヨトウ等の害虫が多発しやすくなる。

（２）事前対策

- ① 用水路から入水が可能な場合は、畦間に通水する。なお土壌が過湿になると生育に影響を与えるので、速やかに排水する。
- ② 雑草が水分を収奪するので、除草剤や中耕・培土で除草に努める。なお、中耕は乾燥を助長するので適期に浅く行う。
- ③ 害虫の発生に注意し、遅れないように防除する。

（３）事後対策

- ① 残草が多い場合は、茎葉除草剤で処理する
- ② 病害虫の発生状況を確認し、必要に応じて追加防除を行う。

【秋そば】（播種期～生育期）

（１）予想される被害状況

- ① 土壌水分が不足すると発芽不良となる。
- ② 発芽後の生育が不良となる。

（２）事前対策

- ① 用水路から入水が可能な場合は、土壌水分を適度に高めてから耕耘し、播種作業を行う。
播種後に畦間に入水を行う場合は、過湿にならないよう注意する。
- ② 雑草が水分を収奪するので、条播きでは早めに除草を行う。
- ③ 播種期の範囲内で降水を待ち播種するが、播種時期の遅れに応じて播種量を多くする。

（３）事後対策

- ① 発芽不良で欠株が多かった場合は、追播きや再播種を行う。

いもち病は、穂ばらみ後期と穂揃い期に防除する。

紋枯病は、高温で急激に進展する。穂ばらみ期から出穂期に防除する。

稲こうじ病は、使用する農薬により防除時期が異なるので、散布時期を確認の上、適期に防除する。

ウンカは防除情報を確認し、適期に防除する。

カメムシは、穂揃い期とその7～10日後に防除する。